



もにたん
しおふじ

御成人向け



もにたん
しおぶじ

【即】

迷い込んだら抜け出せない、と噂の迷いの竹林という土地がある。視界全てを竹が覆うほどに生えているのだ。

同じような景色が続くため、自分がどこを歩いているのかわからなくなってしまおう、というわけだ。

しかし、抜け出せないというのにはもうひとつ理由がある。

迷いの竹林の奥の奥。そこに知る人ぞ知る秘密の『風呂屋』があるのだ。

自分の目の前で一人の女性が服を脱いでいる。わざわざ、魅せつけるように、だ。

それだけでもう自分の股間は期待に盛り上がっていた。

こんなところにいるのだ。もうこんなことは慣れっこだろうに、わざと嫌らしく、劣情を煽るように衣服を脱ぐのだ。

細い、白い指が私の股間へと伸びる。彼女が触れる前からすでにそれは怒張しきっていた。がちがちに固まっている陰茎に手を添わせ、口に含んだ。

これは所謂『即即』の、最初の『即』だ。

部屋に入りふたりきり、服も脱ぎたてて、口で清めてもらう。とろけるような彼女の口内で、私はすでに限界すら覚えていた。

【そく】

輝夜との勝負に負けただけ、最近罰ゲームをかせられるようになった。

「最近お風呂屋さんを始めたのよね」

そうアイツは言っていたのだが、実際は罰ゲームとして、そこに放り込まれるのだ。

「殿方と一緒に風呂にはいってもらおうわ。」

あ、それとね、もし一緒に風呂に入る際に……恋に落ちちゃったとしてもしかたがないわよね？」

意味がわからなかった。初日はうとんげと一緒に『お客様』の相手をさせられた。身体を使っただけの『ご奉仕』だ。

拒否をしようと思えば、できたのかもしれない。しかし、これは罰ゲームなのだ。

拒否は、できない。そんなことは私のプライドが許さない。

相手をさせられるのはこれで何人目だろう。今日の『お客様』はいつにもまして……その、立派なモノをお持ちのようだった。

これが、私に……？いやいや、何を考えてるんだ。

もうこれ以上ないくらいに硬直してはいるのだが……、これも規則なので、舐める。私は嫌なんだ。アゴも、痛いし……。それに、男性のこれはすこし……グロテスクだし。



ドキ

おお、意外と
大きいねえ

ドキ

着痩せするタイプなのかな
嬉しくなっちゃうね。



ドキ

ドキ

いやあ、こんな美人さん
と一緒に風呂だなんて、
嬉しいね

んく

……



ドキ

ドキ

その、
おおきいですね……

——お、すごいすごい
よくはいったねえ
あったかいよお

ドキ

ドキ



……

ドキ

あはは、よく言われるよ

【即】

「ん、はあ……」

他人よりはいささか大きい、私の自慢のモノが彼女の中に入っていく。

下の口で包み込むようにくわえ込んだ彼女の、上の口からは思わず声が出てしまった、という感じで声が漏れていた。

体内に他人が入ってくる、という感触というものはどういうものなのだろう？ 男でも味わえないことも無いだろうが……それは考えないことにしよう。

本日のお相手の彼女の体内はといえば、まるで炎のように熱いくらいだった。他人の体温差をこんなに感じることはなかなかないだろう。

「くあ、ま、まって」

私はここぞとばかりに快感を得ようと、下から彼女を突き上げる。

彼女の奥に尽きこむ。カリで膣壁を擦りあげる。その度に『もこたん』ちゃんからは喉から自然と声が漏れてしまったかのような、生の声が漏れ聞こえた。

股間のモノがぎゅうぎゅうと絞られる。つまり、逃したくないかのように、ずっとくわえ込んでいたい、と言うように。

しかし、私は惜しむらくも昇天した。

【そく】

こういうことをするにあたって、抵抗がないわけではない。でも、それを拒んだら輝夜に何を言われるやらわからない。

ウブなのね、もこたん。なんて言われたらまるで尻穴から腕をつっこまれて、心臓を鷲掴みにされたような気分になるに違いない。

それに比べれば、まだ、

「あっ」

お、おつきいっ！？

自分の膣が『お客様』のモノによって押し広げられていくのがわかる。かなり、大きい。ぶらんぶらんと揺れる男性器とは違って、女のモノは体内にある。熱い血潮が脈打っているとしても、温度差は感じる。

体内に迎え入れる感覚。自分の体内が、この、大きなもので、

罰ゲームだとはいえ、仕事だとはいえ、だ。

「やっくあっ！？ ま、まって」

『お客様』はもう我慢が出来なかったのか、私にリードはさせてくれなかった。快感を得ようと、少し乱暴に、腰を上下に動かした。

剛直した男性器が私の体内で暴れている。

節くれだつた欠陥が、ひ、あ。うう。もう、

イっ、あ……。胎内に、彼のサーメンが……。

【洗】

こういうところで身体を洗う際は、もちろん普通とは違った洗い方をする。

すべてを一緒にいる女性にゆだねるのだ。

まるで自分では身体を洗えない子供にでもなった気持になるが、まあ、それも悪くない。

全身をタオルかなにかに見立てて、彼女のありとあらゆる部分で、私の身体を洗ってもらう。

たわわに実った胸が、自分の背中に押しつけられている。

腕を包みこんでいる。私の腕の形に沿って、面白いように形を変えていく。

まるでにゆるん、と自分と彼女が入り込んできて、一緒に、一つになってしまいうんじやないかという錯覚を覚える。

それくらい彼女は丁寧に、丹念に私の身体を洗ってくれていた。

私の肌と接する面積が一番多くなるようにするにはどうすればいいのかを探しているようですすらあった。

本当にこの、『もこたん』ちゃんがいとおしく思えた瞬間だった。

【あらう】

私の胎内にはまだ、彼が放った精が入っている。もしかすると、何かの拍子にあふれ出てきて、股から太ももをつう、と滴るかもしれない。

でも、そんなことを気にしている暇もなかった。

この罰ゲームには時間が限られているのだ。その限られた時間で、きめられた行程をちゃんとこなさないといけない。

何が「恋に落ちちゃっても仕方がない」なのか、さっぱりわからない。

ここはいちおう『風呂屋』であるわけだが、『お客様』にはちゃんと身体を綺麗にしていただかないといけない。

ただし、『お客様』の身体を洗うにつかうのは自分の身体だ。

女の軟肌が一番いい……らしい。本当かどうかは知らない。

自分の胸に塗りつけた泡で、『お客様』を綺麗にしていく。私には生えていないのだが、陰毛を擦りつけることでお客様の肌を磨く……らしい。

——なんだかな。

いやあ、
スツキリ
スツキリ

一回だけでもう勘弁
なんて言われるかと思ったよ

ぬる。

ぬる

すごかったです……
その、ご立派で。

お痒い所は
ないですか？

はは
大丈夫だよ

にやーる

【湯】

湯船につかるといふ行為は魂を洗うらしい。自分の魂とやらが何色をしているのかはわからないが、自分の目には今この湯は桃色に見える。

決して二人分が収まるのにちょうどいいサイズの湯船ではない。そこに匠のいやらしい創作が見て取れた。

この設計者はとてもいい趣味をしていると思う。

どうしたってしようがないくらいに『もこたん』ちゃんと密着してしまう。目の前には彼女が身体を折りたたんだせいで、逆に突き出してしまった二つの山が見える。

こういう時はへたに目をそらしてはいけないのだ。見るのは失礼だが、見ないのはもつといけない。女性にとってそれは恥なのだ。

なので、じっと見る。

じー……っと見つめる。

彼女の頬が赤く染まっているのは、決してお湯の温度のせいだけではないと思う。

【や】

もともと私は風呂に浸かる、という習慣はない。普段は身体を拭くくらいで済ませている。偶に風呂にはいるとしたら、ドラム缶風呂だ。

しかし輝夜に負けてしまえば、風呂にはいるのは確定してしまう。できれば一人でのんびりと身体を伸ばして入りたいんだけど……。

ここでは『お客様』と一緒に、狭い風呂にはいることになる。背中を向けて入れれば恥ずかしいと思うこともないのだけれど……、突然胸を揉まれたりしてドキっとしたりする。

なので、恥ずかしい感情を押し込みつつ、正面を向いて入る。

この狭い湯船の中ではどうしても肌が触れ合う。お湯もそんなにぬるい温度ではないはずなのに、肌と肌の接点は火傷をするんじゃないかと思うくらい、熱かった。

『お客様』もきっと、興奮しているんだろうと思う。

たかがお風呂に入るだけなのに、なんでこんなにドキドキしなきゃいけないんだか……。



恐縮です...

実をいうと里で見かけたことが在るんだ。
こんなにベッピンさんだとは思わなかったよ

びっ

『マットプレイ』

マットは嫌いだ、という人もいるらしいが、これがないやこういう店を味わったとはいえないだろう。

私は毎回お願いしている。

嬢の腕の見せ所もここだと思う。生まれ持った、そして鍛え、磨いてきた身体を味わい尽くすというのも勿論大事なことはあるのだが、技術というものも知っておかなければ、嬢の努力を無駄にしてしまう。

空気ではんぱんに膨らんだマットに寝転んだ私の身体を上、嬢が『もこたん』ちゃんが覆いかぶさる。

ローションによって肌の摩擦は少なくなっており、女体の柔らかさを満喫できる。手で好きなように揉みしだくのも面白いのだが、重力やら私の身体のラインに沿って形を変えていく乳房を観察するのも面白い。

全身を愛撫するように嬢が文字通り回る。普段は見せることも無いだろう部分を惜しげもなく私に晒している。

固く天を向いた私の陰茎だけが彼女の動きに抵抗するかのように障害になっているが、ローションにはさすがに負けてしまう。乳房、太もも、そして口。それぞれで刺激されている。気を緩めたら、大変だ。

【ぬるぬる】

粘着く液体を全身に塗りたくる。ぬるぬると、てらてらと怪しく光を反射している……。

『お客様』はすでにマットに仰向けになっていて、私を待っている。男の人の身体というのは大体硬いものだけれど、一部が特に硬い……。言うまでもないけれど、男性器のことだ。

ほんの少し前まで私の口の中、そして身体の中に入っていたものが、今はおへそのあたりにある。立派に存在を主張していた。私の身体に塗られたローションを『お客様』に塗りたくるように、余すところなく全身に塗りつけていく。無論、私の身体で、だ。

身体を洗った時にも使ったように、胸で挟みこむようにして全身を巡っていく。

ここで大事なことは、常に股間への注意だ。『お客様』の一番敏感な所だし、それにとっても繊細なところだ。上に乗っているのだから、変に体重をかけ過ぎないようにしなきゃいけない。かといって、疎かにしてはいけない。

だから丹念に、舐め上げる。亀頭の先端にキス、カリをなん周もくると、竿には手だって絡ませる。玉袋だって、吸い上げるように刺激を忘れない……。

なんでこんな技術ばかり身につくんだ？

やっぱりこれがないとねえ
ここに来るまでに疲れたし、
全身マッサージお願いね。

ぬる

ぬる

ぬる

ぬる

そんな……

……の……の……

もしたんちゃん、
また濡れてきてるん
じゃない？

ぬる、

ぬる、ぬる、

【仕上げ】

このままマットでまた騎乗位、でもいいのだけれど、最後はまたベッドでお願いした。ここは頼めば好きな体位を試せる。

というわけで、後背位をお願いした。後ろからということ、心配になる嬢もいるだろうが、『もこたん』ちゃんは快諾してくれた。ぷりん、とかわいいおしりを自分に向けている。このままかじりつきたい衝動にも狩られるが、それは辞めておこう。

むんず、と彼女の桃のような尻を掴み……龟头を彼女の陰部にあてがう。一気に入れてしまうのでは感動が薄れてしまう。徐々に、徐々にズズと彼女の中へと埋めていく。

一度味わったものではあるが、やはり挿入時は堪らない。下になっていたときはまた気持ちよさが違う。

絡みつくような膣肉。十分なくらいに湿っており、潤滑は十分だ。

嬢から漏れる嬌声が弑虐心を増長させる。次第に高まる射精感。限界が近い。でも、もう一度出したら終わりになってしまう。だが、私は腰を動かすのを辞めることができなかった。彼女を味わいつくしたい。可愛く漏れる声のパターンを全て制覇したい。しかし、ぐん、と快感がうねりを上げて襲ってきた。

『最後のご奉仕』

最後の仕上げでまた『お客様』と繋がる。このままマットでというのが普通の流れなんだけど、お客様の希望でベッドで、というところになった。

バックで、と希望されたんだけど、本当は少し怖い。無理やりされたりしないか、心配だった。でも、話している限り紳士っぽい人だし、まあ……いいかな。

うつ伏せになって、おしりを『お客様』に差し出す。何時入れられるのかは、彼の気分しだいだ。いきなりずっぷり入れられると、びっくりしてしまうけれど、それよりも怖いのは、じっくり舐られるように入れられることだ。

彼は、其のたぐいだった。一つの快感すら取り逃さないように、一つ一つを味わっている。だんだんと突き入れられていくのがよくわかる。少しずつ入れられる度に、感じてしまう。

否が応にでも思わされてしまう。私は今、この人に支配されているのだと。

本当に、この人のおち○ちは大きい、それだけじゃなく、私の動作の一つ一つをつぶさに見て、あ……温かいのが、流れてきた。これで今日のご奉仕は……おわり

おひさしぶりです。虎八です。

冬コミはいけなかったので、イベントの参加自体は去年の夏コミ以来になります。

なんだかそのあたりからさっぱり金欠が続いてまして、色々大変になってます……。

主な原因は引越してでしょうか。都会は色々お金がかかりますね……。トホホ。

ただ、都会にいたので、色々イベントに参加したいなあ、というところから今回は月の宴に参加させて頂きました。実は初めて参加したイベントが月の宴だったりします。もう何年前かなあ……。まあ、そんな感じですよ。

今後は動画なんかも作りたいなあ、と企んでいます。これはもしかすると何回か言った気もするんですが……。

今回は本気っす。マジやるっす！

俺やってやるっす！

ニコ生なんかもやっていくので、お暇がありましたら足を運んでやってください。

虎八でした。

原作：東方Project/上海アリス弦楽団

発行：伊達屋虎八/伊達虎！

印刷：ねこのしっぽ

発行日：2013/03/10 月の宴6

Twitter：tora8

PixivID：55076

ニコニココミュニティ：co1287380

メールアドレス：mokuJinnn@hotmail.com

お仕事なんかも募集中です！



© 2014 Shueisha